

2, 3歳児クラスにおける子どもの基本的生活習慣の形成について

— 保育者の観察記録を通して —

渡部 昌史¹⁾*・古田 康生²⁾・高月 教恵¹⁾

1) 新見公立短期大学幼児教育学科 2) 岐阜経済大学経営学部スポーツ経営学科

(2017年11月15日受理)

日々の保育の中で子どもの基本的な生活習慣の育ちに、保育者がどのように関われば良いのか、また、家庭とどのように連携をしていくのかについて、3歳児前後の子ども3名を対象に検討を行った。観察は担任および対象園の保育士が、子どもの実態を観察する自然観察法を用いた。観察期間は、1年間である。各園児の観察記録については、毎月検討を行い、子どもの姿と保育者の関わり方、家庭との連携について整理した。その結果、保育者は、日々の保育活動の中で子どもとの信頼関係を構築していくこと、家庭と連携して保護者と喜びを共有することが、基本的な生活習慣の形成に繋がることが明らかとなった。よって、保育者はこの要因を認識して、子どもたちの基本的な生活習慣の形成にむけて実践指導を行っていくことが大切であると考えられる。

(キーワード) 基本的な生活習慣の形成、2, 3歳児クラスの子ども、観察記録

I. 目的

就学前の子どもたちは、食事、睡眠、排泄行動、衣服の着脱、身の清潔に関する事など、基本的な生活習慣の形成と習慣化が求められている。この時期における日常生活の過ごし方が、それ以降の生活の基盤となる。また、基本的な生活習慣の形成過程は、心身の健康の基礎を培うことに繋がり重要である。

基本的な生活習慣の形成過程は、まず家庭で行われる。子どもは養育者と毎日の生活を通して、生活に必要なことを学んでいく。その後、多くの子どもたちと過ごす園生活の過程で、生活習慣について多くのことを学んでいく機会を得る。保育所保育指針解説書には、「家庭と保育所の生活リズムがバランスよく整えられるよう配慮すること」「排泄の自立の援助は、その生理的機能の発達の個人差や情緒面での配慮がより重要であり、家庭と保育所との連携が望まれる」こととある¹⁾。よって、保育現場は、家庭と連携を図り、子どもたちの生活習慣の自立を促し、健康な日々が送れるようにすることが望まれる。しかし、近年は、母親の就労の増加により²⁾、家庭での保育力は低下していると考えられる。また、親の都合により、テレビなどで夜更かし、短睡眠時間、自律起床が出来ない、朝食を欠くなど³⁾、健康的な生活習慣が送れていない状況の子どもたちが存在しており問題であると考えられる。このような状況において、保育者は、どのように子どもたちと関わりをもち、基本的な生活習慣の育ちを促していくのかは大きな課題であるといえる。また、就学前の子どもたちにおける生活

習慣の形成には、家庭との連携が重要であると考えられている⁴⁻⁵⁾。したがって、これらの生活習慣が獲得される過程を保育・教育の専門職である保育者により記録された「観察記録」をもとに検討し、明らかにする意義は大きいといえる。

そこで本研究では、自我が芽生える3歳前後の子どもを対象に、基本的な生活習慣の育ちにおける保育者の関わり方と家庭（保護者・養育者）との連携について検討したので報告する。

II. 方法

1. 対象

岡山県A市に在籍している園児3名を対象とした。

2. 観察記録

観察は、対象児の担任および対象園の保育士が、子どもの生活習慣に関する実態を観察する自然観察法を用いた。保育士により記録された観察記録を対象とした。観察期間は、2006年4月から2007年3月までの1年間である。各園児の観察記録については、毎月検討を行い、子どもの姿と保育者の関わり方、家庭との連携について整理した。

3. 倫理的配慮

対象者には測定・調査に先立ち、目的・方法、個人名が特定されないこと、研究以外には使用しないこと、研究に協力しないことで不利益を被ることはないことを文章で伝えて同意を得た。

*連絡先：渡部昌史 新見公立短期大学幼児教育学科 718-8585 新見市西方1263-2

Ⅲ. 結果と考察

1. 調査対象児の基本的生活習慣の形成過程

調査対象となった3名の子どもの基本的生活習慣の形成過程は、次の通りである。調査開始当初の姿と生活習慣の育ちを整理し時系列に記述した。

①A子の場合

A子は、前年度の途中に入所した継続児である。前年度の終わりには、トイレでの排泄が少しずつ出来るようになり、言葉も徐々に増えていた。しかし、4月に入り、クラスが変わるとトイレや水道の位置が高くなった。A子は身長が低いと、トイレでの排泄がうまく出来ず、失敗が増え紙パンツで過ごしていた。保育者や友だちとの会話は、まだ難しく、気に入らないことがあると怒ったり、泣いたりしていた。周りの友だちの様子をあまり気にすることなく、一人で遊ぶことが多い。また、自分の身の回りのことは、保育者の援助があれば出来るが、A子自身では指先が思うように動かず、ボタン掛けのある衣服の着脱や荷物の片付けといったことが一人では難しい。

1年間のA子の生活習慣の育ちと保育者の関わりをみると、4月はクラスの雰囲気慣れた頃から、日中パンツで過ごすようにした。5月は、排尿に失敗した場合、自分から保育者に知らせることはほとんどなかった。豆つかみの遊びでは、スプーンで掬うだけで、箸を使うことはなく、豆が足元にたくさんこぼれても全く気にせず遊び続けた。また、自分の思い通りに行かないとすぐに怒る。物事に対して、飽きるのが早い。6月には、少しずつ排尿の間隔が自分で分かりはじめたのか、失敗は多いものの自分から便器に座る。排尿を失敗した場合、自分から保育者に知らせることができるようになった。7月には、母親が出産を迎え、少し情緒不安定になり、排尿は成功と失敗を繰り返していた。8月には、トイレに閉じ込められてしまったことがあり、トイレに対して恐怖心が芽生え、保育者が付き添わないと怖がって、一人ではトイレに行かなくなった。遊びの面では、集中して長時間、一人で豆つかみやパズルを楽しんでいる様子が見られた。9月には、運動会の練習を通して、しっかりと身体を動かすことができるようになり、活発になってきた。10月には、日中の排尿の失敗がほとんどなくなった。言葉が増えて、自分の言いたいことを言葉で表現できるようになり、保育者や友だちに思いを伝える姿が見られた。11月に入ると、トイレに行くまで排尿を我慢する姿が見られるようになった。12月には、指先が発達し、荷物の片付けや着脱がだいぶ一人で出来るようになってきた。1月は、寒さから何度も膀胱炎になったが、痛みながらも便器に座って排尿をしていた。2月には、ほとんど一人で荷物の片付けが出来るようになり、タオルなどもきちんと畳んでしまっていた。3月には、排便がトイレで出来るようになり、完全にパンツで生活するようにな

なった。遊びでは、しっかりと友だちと関わり、自分で工夫して遊ぶことが出来るようになってきた。

②B子の場合

B子は、新入園児として2、3歳児混合クラスに入園した2歳児である。入園後は、登園時から降園時までほとんど泣いて過ごしていた。ごはんやおやつを食べない時があるし、オシメ交換を嫌がっていた。また、保育者の傍から離れることが出来ず、一日中抱っこやおんぶを求めている。保育者の姿が見えなくなると、不安で激しく泣きながら保育者を探し、トイレまで追いかけていた。クラスでは、体格が一番小さく、3歳児の友だちのペースになかなかついていけず、持ち物の始末や食事の準備・片づけなど、何でも保育者や友だちにしてもらっていた。保育者が気分を変えようと、戸外遊びやごっこ遊びに誘っても、「いやっ」の一点張りであった。保育者が話しかけて返ってくる言葉は、「母さんは?」「ばあちゃんは?」だけであった。このことから初めての集団生活に対し不安を感じているB子の様子が伺われる。また、B子は、多くの基本的生活習慣の自立が出来ていないといえた。

1年間の観察記録からB子の生活習慣の育ちをみると、初めてオシメ交換ができたのが4月中旬であった。これを契機に母親に布パンツを用意してもらった。大好きなキャラクターの布パンツを喜び、保育者のトイレへの誘いに、「先生と一緒に行く。」と初めてトイレでの排尿に成功した。母親が連絡カードにとても嬉しかったと書いてきたことからB子の喜びが伝わってきた。5月に入り、日中は泣くことが少なくなったが、登園時は泣きながら母親に抱かれていた。中旬には、パンツをはいて登園してきた。泣いていても保育者のトイレへの誘いは嫌がらず、「先生行こう。」と積極的に行こうとする様子が見られた。トイレでは失敗することもあるが、上手に排尿ができていた。6月には、散歩中に尿意を言葉でなく、態度で伝えることが出来た。保育者がすぐに気づかなかつたため、B子は失敗してしまった。大切なパンツを濡らしてしまったことがB子にとってショックなことであつたらしく、それ以後はパンツを濡らしたくないために、自分からトイレへ行くようになり、中旬からは排尿の失敗なく過ごせるようになった。この頃から少しずつ園生活にも慣れ、一日泣くことなく生活をし、自分から積極的に遊び、友だちとも遊んでみようとする姿が見られるようになった。トイレトレーニングが完了したことを契機に、自信がついたと考えられる。7月には、園での行事や活動を楽しみに待つようになり、笑顔で登園できるようになってきた。スモックのボタンかけを一人で頑張ろうとする様子が見られた。8月には、荷物を自分で持って、母親と手をつないで登園が出来るようになる。排泄が完全に自立し、3歳以上用の和式トイレを使っていた。そのため、パンツを脱がないと排泄ができず、ト

2. 3歳児クラスにおける子どもの基本的生活習慣の形成について

イレに行く度にパンツを裏表に履いていた。パンツの表がわかるようにリボンのついたパンツを母親が用意してからは、間違えず履けるようになった。何か目印になるものがあるとわかりやすく、保育者も「リボンがある方が表よ。」と声をかけると、B子はパンツの裏表を間違えずにはけるようになる。9月には、自分より小さい友だちがクラスへ仲間入りしたことが嬉しくて、世話をしようとする姿が見られた。10月には運動会、12月には発表会に参加し、3歳未満児にもかかわらず、3歳以上のプログラムへ参加をするなど頑張る姿が見られた。保育者や両親から、「すごいね。」「お姉ちゃんになったね。」とほめられたことがうれしく、さらに自信がついてきたと思われる。この頃から手伝いを好み、当番の順番を楽しみに待つようになったり、自分より小さい友だちの世話をしたり、遊んであげたりしていた。基本的な生活習慣は、ほぼ一人で出来るようになってきた。一方、今までは保育者の助言を守ろうとする姿が見られたが、自分の思いでしようとする面が伺えるようになった。1月には、年末年始の長い休みから生活リズムが崩れたことにより、休み前にできていたことが雑になっていた。食事のマナーについて保育者は繰り返し三角食べを伝えるが、B子は好きな物ばかり食べ、嫌いな物を残していた。2月中旬、繰り返し伝えてきた三角食べをB子が小さい友だちに教えている姿が見られた。その様子から食事マナーが身に付いた様子が伺われる。3月には、自分から積極的に持ち物の始末が出来るようになり、困っている友だちの手伝いをしようとする姿も見られるようになってきた。

③C男の場合

C男は、昨年からの継続児である。おとなしい性格で口数は少ない。自分の思いや考えを保育者や友だちに話すことはほとんどない。母親の話によると、家庭では園の様子をよく話すとのことである。保育者に言われたことはしようとする意欲は見られ、一つひとつのことを保育者に確認しながら、行おうとする慎重さが見られる。食事面では、目立った好き嫌いは見られないが、食べる量は少なく、時間がかかる。保育者が他の子どもに食事マナーについて注意していると、あわてて直す姿が見られる。排泄は、自分から尿意は知らせないが、促せばトイレに行き排尿できる。失敗した時には、保育者に知らせず遊び続けているが、保育者が着替えや排泄に誘うと嫌がることなく一緒にトイレに行くことができる。このことから、一人でできることは少なく、自分からしようとする姿も見られないが、保育者の誘いや関わりによっては、行おうとする姿が伺われる。

1年間の観察記録からC男の生活習慣の育ちをみると、4月は、パンツで過ごす習慣がついておらず、紙パンツの上にパンツを履いてしまう姿が見られる。5月には、排尿

の間隔がずいぶん長くなり、失敗が少なくなる。紙パンツの上にパンツを履くことがなくなる。6月には、まだ尿意を自分では知らせないが、パンツでの生活に慣れてきて、降園時も自分からパンツで帰りたがり、保育者や母親を驚かせた。パンツでの登園が、自信につながっているように思われる。7月には、排尿の失敗がほとんどなくなり、少しずつ自信がもてた様子であった。クラスの雰囲気にも慣れた様子で、口数が増え、保育者に家庭での様子を自分から話すようになった。以前は一人で遊ぶことが多かったが、少しずつ友だちに興味がでてきたようであった。しかし、友だちと一緒に遊ぶ中で、自分のしたいことを伝えることは、まだ難しいようであった。8月には、尿意がきちんと伝えられるようになった。また、家庭のことや自分のことを保育者によく話したり、保育者の傍で遊んだりする様子から、C男が保育者に心を開いていることが伺われた。9月には、運動会の練習に積極的に参加し、行動が活発になった。それまでは紙パンツをはいて昼寝をしていたが、周りの友だちがパンツで昼寝をしていることに刺激を受けたようで、「パンツで寝たい。」と自分の思いを保育者に伝えた。遊びにおいては、自分の思いを友だちに言葉で表現する姿が見られるようになった。10月になると、遊びに夢中の時でも尿意を保育者に伝えるようになり、失敗しても保育者に知らせるようになった。生活面では、当番活動を積極的に進めていた。物事の理解は少し時間がかかり、保育者に確認してから行動するが、製作面においては何事も最後まで丁寧にやり遂げようとする姿が見られた。パンツで昼寝をしていたが、寒くなっておねしょが増えてきたため、おねしょマットを敷いて昼寝をするようになった。12月には、同じ3歳男児とごっこ遊びや大きな声で話したり、おもしろいことを言って友だちや保育者を笑わせたりと活発になってきた。自分の思っていることを保育者や友だちに伝えたり、自分の作品を保育者に見せたりと、自信をもって活動していることが伺われた。1月には、羽子板の絵を最後まで頑張って完成させる姿が見られた。年度末には、食事マナーが出来ていない友だちのことを保育者に伝える姿や友だちに手本を見せるなどから、C男の自信が伺えた。基本的な生活習慣が十分身についたことで、食欲も増し、活動の幅も広がり、見通しをもって生活することができるようになったと思われる。

2. 生活習慣の形成過程における保育者の関わりと家庭との連携

①A子について

保育者の関わりとしては、A子に対して、日中パンツで過ごすように配慮し、排尿に失敗した場合は、A子自身が気づける場（機会）をとらえ繰り返し声をかける、トイレに付き添うなどして、A子がわかりやすい方法を探しながら過ごすように心がけた。このように生活面の自立を促し

た。遊びでは、指先をしっかりと使えるような遊びを取り入れ、楽しみながらA子の負担にならないように配慮した。また、A子の気持ちに共感する、できたことをしっかりとほめるように努めた。

家庭との連携としては、登降園時に、保護者しっかりと話をする時間を設けて、家庭や園でのA子の様子を伝えあい、生活面での自立に向けての方法を相談して進めた。4月には、家庭訪問があり、トイレトレーニングを進めていくために、布パンツの使用を始めることを提案し、布パンツを用意してもらった。また、ボタンかけが苦手なA子のために、もう少し着脱の簡単なパジャマに替えてもらうようにした。5月には、布パンツでの降園を徐々に増やした。8月には、トイレへ行くことに恐怖心が芽生えたA子の様子を詳しく伝え、園と家庭での連携をしっかりと図り、A子の心のケアにも配慮している。排泄面では、A子の成長が少しでも見られると、保護者に伝えA子とともに喜べるように働きかけた。

以上のことから、排泄の成功と失敗を繰り返していたA子は、排泄が成功した時に、保育者や保護者と共に喜び合った。そのことによって、排泄に自信がつき、自立へと繋がったと考えられた。A子はその他の生活習慣においても自分でできることが増え、遊びでは集中して遊ぶことができるようになった。

②B子について

保育者の関わりとしては、4月当初、B子の不安定な気持ちが安定するようにスキンシップをはかり、信頼関係が構築できるように心がけた。落ち着いて生活が送れるようになった夏以降からは、ほめたり励ましたりしながらB子に自信がつくよう肯定的な言葉がけをした。B子が一人でできることが増え、最後まで頑張ろうとする姿が見られるようになってからは、保育者は出来ていないところのみを援助して手伝い言葉がけをした。1年間の家庭との連携は、4月当初、送迎時に涙を流し、B子の園生活に対し不安を感じているように思われた母親と、連絡カード等を利用して園での様子を伝えることや園で行っていることを家庭でも実施してもらうよう依頼した。4月中旬に布パンツを持ってきてもらうよう母親に頼むと、快く用意してくれた。母親が用意したパンツをB子が喜んで履き、トイレトレーニングを頑張っている様子を伝えた。このように連絡カード等を利用して園での様子を母親に伝えることで、B子が園で落ち着いて生活できていることを知り、母親が家庭での様子をよく教えてくれるようになった。これを契機に母親は送迎時に涙を見せなくなった。5月には、園においてB子の排尿のタイミングが合い一日失敗なく過ごしていることを降園時に母親に伝えると、家庭でもトイレトレーニングを親子で取り組んでいると話してくれた。10月には、連絡カードにB子が家庭でよく手伝いをしてくれるように

なったこと、毎朝保育園に着ていく服を自ら選び用意が出来るようになったことなど、B子の成長を伝えてくれ喜んでいる様子がうかがわれた。2月には、病気のため長い間休んでいたB子が久しぶりに登園し、泣いて過ごしていることを連絡カードで伝えても、母親は以前のように心配する様子は見られなかった。これらの連携過程を省察すると、保護者（母親）が保育者を信頼し、安心して預けてくれるようになっていく過程が伺われる。3月末には、毎朝保育園に着ていく服を自分で決めるのが日課になっているとのことであった。

以上のことから、母親と離れて送る生活が不安で、一人では何もせずに泣いていたB子だったが、保育者がスキンシップを図ることで安定した生活が送れた。そして、B子の気持ちが安定することによってトイレトレーニングが進み、排泄の自立ができたと考えられた。これをきっかけに、B子は少しずつ自信をもつことができ、色々なことをやってみようという気持ちが芽生えてきたのではないかと推察される。

③C男について

保育者の関わりとしては、コミュニケーションやスキンシップを大事にしながら、信頼関係が築けるように心がけた。保育者は、C男の理解に努め、一緒に楽しく遊ぶことや生活、遊びに参加しやすいようにしながら、トイレトレーニングを進めていった。1年間の家庭との連携としては、4月には、連絡帳で紙パンツの上にパンツを履いていたC男の様子を伝えた。それに対して、母親は家庭での排泄の様子を連絡帳で保育者に伝えてくれた。家庭でトイレトレーニングを進めようとする母親の様子がうかがわれたため、C男の負担にならない程度に、園でも少しずつトイレトレーニングを進めていくことを母親に伝えた。5月には、パンツでの登園を家庭にお願いした。そのことはC男にとって嬉しかったようであった。園でおとなしいことを母親に知らせると、一人っ子のため、大勢の中に入るのが少し苦手とのことであった。6月には、パンツで降園したいというC男の気持ちを母親に伝えた。母親と一緒にC男の成長を喜びあった。7月には、保育者が誘うとトイレに行くが、まだ自分からは尿意を言わないことを母親に伝えた。家庭では尿意を言えるようになり、一人でトイレに行くようになったと母親は喜んでいる様子であった。引き続き、C男のペースでトイレトレーニングを進めていくことを母親に伝えた。8月には、家のトイレにおいて一人で排尿できたことを保育者に連絡帳で伝えてほしいとC男が母親に頼んだとの連絡があった。このことから、C男と母親が共に喜んだ様子が伺われた。9月には、「パンツで昼寝したい。」と言うC男の様子を知らせ、母親と保育者はC男の成長を喜び合った。2月には、食べる量が増え、時間がかからず食事ができるようになった様子を連絡帳で伝えてくれた。こ

2. 3歳児クラスにおける子どもの基本的生活習慣の形成について

のことから、母親は安心して、C男の成長をしっかりと受け止め、喜んでいる様子が伺われた。保育者がC男の育ちを知らせることで母親が喜び、子どもの目線に立つことにより、C男の成長につながったと思われる。

以上のことから、パンツで過ごす習慣がついていなかったC男だが、保育者の関わりや誘いによって、パンツをはいたり、トイレで排泄する習慣がついた。日常生活の中での保育者とのスキンシップや一緒に遊ぶ楽しさを味わうことを通して保育者との信頼関係を築いたこと、また、母親に自分の成長を共に喜んでもらったことにより、C男は自信をもつことができ、生活面や遊びの育ちにつながったと思われる。

3. 全体考察

本研究では、日々の保育の中で、子どもの基本的生活習慣の育ちに保育者がどのように関われば良いのか、また、家庭との連携について、3歳児前後の子どもの対象に、自然観察法により記録された記録内容の検討を行った。これによりこの時代ならびに時期の子どもの実態把握に繋がり、今後の基本的生活習慣の形成を考えていくにあたり重要な示唆を得ることが出来ると考えられる。その結果、関わり方では、保育者は日々の保育活動の中で子どもとの信頼関係を構築していくこと、家庭との連携では保護者と子どもの成長を喜び合い共有することが、基本的生活習慣の形成を促すことが明らかとなった。

園生活を送る子どもは、養育者のもとを離れて他児とともに集団生活をする。よって、子どもたちは、養育者のいない環境において不安が募ると考えられる。そのため、保育者は受容的なスキンシップで不安な心的状態にある子どもたちを受け止めることによって、子どもたちと信頼関係を築き上げる⁶⁻⁷⁾。また、保育者の言葉がけは、子どもの主体性の育みにおいてとても重要な役割を果たす⁸⁾。以上より、保育者が子どもと信頼関係を構築し、子どもに言葉がけをしていくことが基本的生活習慣の育ちに繋がると考えられる。したがって、B子においては、保育者がスキンシップをはかったことで、B子の中で保育者に対する信頼関係が築けたと考えられた。この信頼関係が基になり、母親と離れて生活することに対する不安が少なくなったと推察された。また、気持ち（気分・精神）の安定が排泄の自立、さらには自信につながり、その他の生活習慣など色々なことに対する挑戦意欲へと繋がったと考えられた。C男に関しても、保育者がスキンシップや一緒に遊ぶなどを行ったことが、C男との信頼関係を培うことになったと考えられた。B子同様に、信頼関係が基になり、パンツを履くことやトイレで排泄する習慣へと繋がったと推察された。

また、子どもの基本的生活習慣の形成には、園と家庭との連携が必要であり⁹⁾、保護者の意識や姿勢が影響してい

る¹⁰⁻¹¹⁾。さらに、「ほめ」は子どもの発達に不可欠で、子どもの発達の一助となる適切な「ほめ」であれば、積極的に行うべきである¹²⁾。本研究の保育者は、保護者に対して、直接話すことや連絡カード等により園での子どもの育ちを保護者に伝えるといったコミュニケーションをはかっていた。そのことにより、園での様子、家庭での様子をお互いに共有することができるとともに、子どもの成長と一緒に喜ぶことが出来た。また、お互いに情報を共有することで、保護者の子どもを見る目を育てることに繋がったと考えられる。つまり、保育者や養育者の大人が日々の子どもの成長した事実を種々の連携方法により共有して喜び、それを肯定的な態度（ほめの言葉やスキンシップ）として子どもに表現することで、子どもは保育者と保護者からほめられ喜ばれたと実感して、自信と意欲を高めることに繋がっていったと推察された。したがって、C男とA子は、保育者と保護者の喜びとほめられたことで、自信がついて排泄の自立ができたのではないかと考えられた。また、2人とも排泄の自立の自信が、生活面や遊びの育ち、意欲へと変わっていったと考えられた。

以上より、子どもの基本的生活習慣の形成には、保育者が子どもと信頼関係を築くこと、家庭と連携して保護者と喜びを共有することが要因として確認された。よって、保育者は、この要因を認識して、子どもたちの基本的生活習慣の指導に繋げていくことが大切であると考えられる。

IV. まとめ

本研究では、自我が芽生える3歳前後の子ども3名を対象に、基本的生活習慣の育ちにおける保育者の関わり方と家庭との連携について自然観察法による観察記録を基に検討した。観察は、対象児の担任および対象園の保育士が、子どもの生活習慣に関する実態を観察する自然観察法を用いた。観察期間は、1年間である。各園児の観察記録については、毎月検討を行い、子どもの姿と保育者の関わり方、家庭との連携について整理した。その結果、保育者は、日々の保育活動の中で子どもとの信頼関係の構築をしていくこと、家庭と連携して保護者と喜びを共有することが、基本的生活習慣の形成を促すことが明らかとなった。

V. 文献

- 1) 厚生労働省：保育所保育指針解説書。フレーベル館、159、2008。
- 2) 総務省：平成27年国勢調査 就業状態等基本集計結果、総務省統計局、2017。
- 3) 小山祥子：幼児の健康と生活状況に関する研究：石川県における幼児の生活状況を中心にして。北陸学院短期大学紀要35、37-52、2003。

- 4) 木林悦子, 上野恭裕, 西谷香苗: 幼稚園・保育所における園児の食・生活習慣についての比較研究. 園田学園女子大学論文集 43, 85-101, 2009.
- 5) 赤澤典子, 荒屋千秋: 幼児の食生活習慣形成のための指導・教育に関する調査研究. 岩手大学教育学部研究年報63, 135-148, 2004.
- 6) 塚崎京子, 無藤隆: 保育者と子どものスキンシップと両者の人間関係との関連: 3歳児クラスの観察から. 保育学研究42(1), 42-50, 2004.
- 7) 松丸英里佳, 吉川はる奈: 3歳児の仲間関係の形成過程に関する研究. 埼玉大学紀要, 教育学部58(1), 127-135, 2009.
- 8) 阿部直美: 保育者の言葉がけにみる子どもの主体性の育みについての一考察: 「遊び」を通して子どもがのびのびと行動できる保育をめざして. 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要5, 89-94, 2006.
- 9) 真嶋梨江, 岡山万里, 高橋, 敏之: 幼児の園への適応とその支援に関する文献展望. 岡山大学教師教育開発センター7, 41-50, 2017.
- 10) 田宮縁, 池田優, 鈴木富美子: 保育者の語りにみる幼稚園における保護者支援: 幼小連携に関する語りの分析. 静岡大学教育実践総合センター紀要22, 53-62, 2014.
- 11) 岡見雪子, 関豪, 辻とみ子: 幼稚園児の食生活習慣と母親の食育との関連性. 名古屋文理大学紀要 12, 131-142, 2012.
- 12) 青木直子: ほめることに関する心理学的研究の概観. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要心理発達科学52, 123-133, 2005.